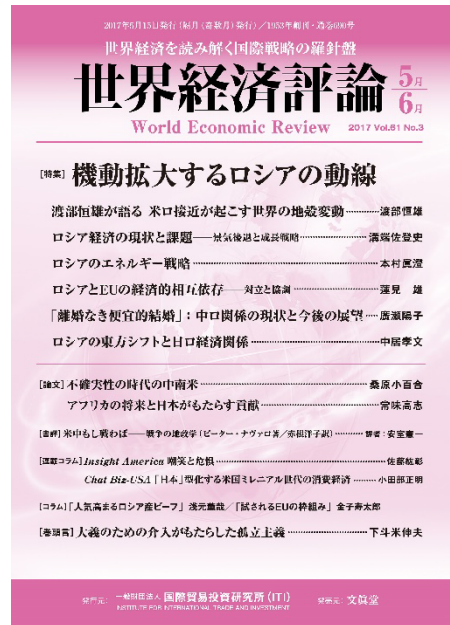


本論文は

# 世界経済評論 2017年5/6月号

(2017年5月発行)

掲載の記事です



## 世界経済評論

# 定期購読のご案内

年間購読料

1,320円×6冊=7,920円

# 6,600円

税込

17%

送料無料

OFF



定期購読  
期間中

富士山マガジンサービス限定特典

※通巻682号以降

## デジタル版バックナンバー読み放題!!



### 世界経済評論 定期購読



# ☎0120-223-223

[24時間・年中無休]

お支払い方法

Webでお申込みの場合はクレジットカード・銀行振込・コンビニ払いからお選びいただけます。  
お電話でお申込みの場合は銀行振込・コンビニ払いのみとなります。

Fujisan.co.jp

雑誌のオンライン書店

ドナルド・トランプ大統領は選挙前例なき野卑な言動がマスコミに注目を浴びた。中でも、その揶揄、嘲笑の先鋒になったのはコメンディアンを司会者とするテレビ番組で、スティーヴン・コルベア、ジミー・ファロン、トレヴァ・ノアといった人たちが、モノローグの部分でジョークとして笑い飛ばす。

他にシットコムの形の風刺テレビ番組 Saturday Night Live では、映画俳優のアレック・ボールドウィンがトランプを真似て大人気を集めている。こうした番組はトランプの大統領選出以来鋭さを増している。

一方、トランプ大統領に対する不安も増えた。アメリカが全体主義国家になったらどうなるのかという懸念がそれで、それを主題とする小説の売り上げがアマゾンで急増し、それらの劇化が上演され、新作劇の舞台化が急がれている。

### 販売の急増する二小説

全体主義になった場合を想定した「古典的」小説では、特にジョージ・オーウェルの『一九八四年』とシンクレア・ルイスの『ここでは起こり得ない』が注目され、1949年に出た『一九八四年』の場合、出版社のペンギン・ブックスが7万5000部の増刷をしたと伝える。

『一九八四年』（邦訳あり）は社会主義国家になった英国を描き、欺瞞に満ちたプロパガンダに支配される社会を描く。執筆の動機は1943年テヘラン会議、戦争中の英国、それに戦後すぐ始まった冷戦と言われる。うちテヘラン会議は戦後の世界を画策する三巨頭の交渉だったが、オーウェルの仮想する「恒久的戦争」では世界が三地域分裂する。この小説は、thought police や  $2 + 2 = 5$  などのほか、作者の名前に依る Orwellian を新造語として英語に加えた。

もう一つ、この小説に14年先立つ1935年に出た『ここでは起こり得ない』は邦訳がないようだが、原題は It Can't Happen Here といい、ある意味では『一九八四年』より切迫した懸念で書かれた。

まず、1929年の株価の暴落に続く大恐慌では右翼とポピュリズムが台頭した。1932年大統領選挙から出馬するにあたってニューヨーク知事フランクリン・ルーズベルトが一番危険視したのはダグラス・マッカーサー陸軍参謀総長とヒューイ・ロング上院議員（ルイジアナ州選出）だった。前者は右翼を代表、後者はポピュリズムを代表して絶大の人気を博す政治家であり、二人はクーデターを起こす可能性があるかと密に洩らしたという。

次に、1933年は1月ヒットラーがドイツ首相になってナチスが政権を獲得、1935年にはロングが翌年の大統領選挙出馬を明らかにした。ノーベル文学賞受賞者シンクレア・ルイスに『ここでは起こり得ない』を書かせたのは、ヒットラーばかりかロングを面接取材したジャーナリストの奥さんドロシー・トンプソンの影響が大きかったと言う。中でも1931年に面接し「驚くほど無意味な」男と蔑んでいたヒットラーが国家の首相になったのに慌てたらしい。

短期間に書き上げた小説では、1936年の選挙でウィンドリップというデマゴグが大統領に選出され、就任するや議會を大統領諮問委員会にしようなど、ファシスト政策を次々に実施する。

ただし、現実には、ウィンドリップのモデルとなったロング上院議員は、1932年の大統領選挙ではルーズベルトを強く支持し、1935年には翌年の大統領出馬を明らかにしていたとはいえ9月に暗殺されてしまった。そして1936年大統領選挙ではルーズベルトが共和党候補を大敗させて再

選されたことは周知の通りである。

また、ポピュリズムとは言っても、ロングのポピュリズムは、累進課税ばかりでなく、「アメリカ人口の4%が国富の85%を占め、国民の75%が負債を払う能力のない現状では富の再分配が必要である」として所得の再分配を明確に打ち出すもので、進歩的なものだった（当時もそう言われた）。これは、つい数年前アメリカ国民を掴んだ「1%対99%」抗議運動の考えに似ている。この計算ではアメリカ個人資産の35%を上位1%が占め、それは下位95%の総計を上回る。

この点、ロングがポピュリズムのデマゴグと呼ばれたとはいえ、大統領候補としてのトランプが経済的に不振な地域の住民に「再び偉大に」すると公約しながら具体案を示さず、特定の人種や身体障害者への侮蔑を大げらに明らかにしたデマゴグのポピュリズムとは異なる。

更に、ルーズベルト大統領は1935年にはロングの考えを「盗んで」、「左傾」して、第二次ニューディールを打ち出し、ソーシャル・セキュリティ法を成立させた。また、雇用促進局（WPA）や全国労働関係委員会、要扶養児童扶助などを設立した。これは自ら述べたという。

それでも、『ここでは起こり得ない』はロング暗殺の翌月出版されるやベストセラーとなり、ルイスの著作では最高の32万冊が売れた。その勢いを得て翌年の1936年には同作を劇化し、他ならぬWPAが全国の舞台上で上演した。その時のポスターでは鉄砲を抱えたヒットラーに似たちよび髭の兵隊が米国の地図の後ろから立ち上がり、それを大きな手が阻止しようとする図案だった。当時のファシズムの台頭に対する不安が極めて強かったことが分かる。

## 舞台化、新戯曲の出現

『ここでは起こり得ない』は今回の選挙の結果突然注目されたわけではない。早くも2015年9月、雑誌「サロン」は、トランプが「全国的嘲笑的になりながら、政治体制全体をジョークの落ちに変えている」という点ウィンドリップに酷似していると同小説を取り上げていた。トランプが共和党候補を徐々に蹴落とし始めた頃だ。

翌年3月には、『ここでは起こり得ない』をピカディオ劇団がニューヨークで一日だけながら上演し、9月にはトランプの台頭を笑って過ごすわけにはいかぬと、カリフォルニアのパークリー・レパートリー劇団が新しく脚本にして上演した。

他方、オーウェルの『一九八四年』の劇化は以前から何度も上演されたが、最近では英国での成功に続いて、ブロードウェイでの上演が今年6月でも始まる。

トランプの大統領の出現に危惧した劇作家にロバート・シェンカンがいる。

シェンカンは、最近、1964年公民権法成立のジョンソン大統領の苦労を扱った戯曲 All the Way がブロードウェイで絶賛を受けたが、同作執筆に21ヶ月をかけたのに対して、トランプの出現に応じる新戯曲 Building the Wall の場合「1年半も待つては役立たない」とわずか一週間で書き終えたと言う。しかも、大統領選挙の直前だった。

劇は2019年を想定し、トランプ政権で多数の移民の拘束、本国送還で果たした役割の結果、判決を待つ刑務所管理者を作家がインタビューする形になっている。2月初め既にアメリカ内で5つの劇場が上演を約しているという。

さとう・ひろあき ジャパン・タイムス コラムニスト。